

# 浄源の『仁王経疏』について

王 頌

## はじめに

『仁王護国般若波羅蜜多經』は略して『仁王經』という。現存する漢訳は二本ある。すなわち『仏說仁王般若波羅蜜經』と『仁王護国般若波羅蜜多經』であり、それぞれ羅什訳と不空訳とされている。

しかし、この二つの訳本を含めていまに伝わっている諸訳本、及び『仁王經』自体の真偽に関しては古来議論のあるところである。この問題に対して、近代の学者たちは文献学的な考察を加えてきた。その中の優れた成果としては椎尾弁匠博士や望月信亨博士らの研究が挙げられる。彼らの研究により、<sup>(1)</sup>『仁王經』はインドから伝来した經典ではなく、中国で作られた經典であることが明らかにになっている。

しかし、文献研究から得られた結果と『仁王經』それ自体の価値を否定することとは直ちに等しくはない。実際に、『仁王經』は古来から歴代の王朝、僧侶及び学者たちに重視されてきた。中国仏教の各宗の代表的な人物の中の何人かは訳本の比較検討をして、それぞれ自分の拠るべき原典を選択し、それに対して注釈を作る、という努力をなしてきたのである。このような動きが集約される形で、所謂羅什訳と不空訳の両訳本をめぐって、二つの系統が形成された。現存するものには、羅什訳本に対しては、真谛の『仁王経疏』六卷（以下の吉蔵疏と円測疏に部分的に収録）、三論宗吉蔵の『仁王般若経疏』六卷（大正三三、三一四―三五九）、唯識の学者円測の

『仁王経疏』六卷(大正三三、三五九—四一九)、天台智顗説・灌頂記とされる『仁王護国般若経疏』五卷(大正三三、二五三—二八六)の四疏があり、不空訳本に対しては、浄源の『仁王経疏』四卷(続蔵四一冊)のほか、唐の良賁の『仁王護国般若波羅蜜多経疏』七卷(大正三三、四二九—五二三)、唐の遇栄の『仁王経疏法衡鈔』六卷(続蔵四一冊)、宋の善月の『仏説仁王護国般若波羅蜜経疏真宝記』四卷(大正三三、二八六—三一四)がある。また、大正蔵八十五卷に著者不明『仁王経疏』と題する断片がある。

羅什訳に対する四疏の著者や成立年代については、先人によって既に論じられている。<sup>(2)</sup> そのうち『真諦疏』はその完本が現存せず、吉蔵や円測の諸疏の中に部分的に残っているだけであるが、それは『仁王経』に対する注釈文献の嚆矢とも称すべきものである。『天台疏』は天台智顗造・灌頂記と題されているが、それが吉蔵と円測の両疏の影響下に成立したもので、智顗自身の手によるものではなく、八世紀のものであることは佐藤哲英博士などの研究によってすでに明らかになっている。<sup>(3)</sup> 一方、不空訳の諸疏については、『良賁疏』を除いて、これまで殆ど研究の対象としては取り上げられなかったというのが現状である。本稿は筆者の本来の課題であるところの浄源(一〇一一—一〇八八)の研究にその中心を置くものであるため、『仁王経』諸疏の比較研究は他の機会に譲り、ここでは『浄源疏』、また『浄源疏』と直接関係があることのみを取り上げて論ずることとする。

## 一 『浄源疏』の成立経緯と撰述目的

まず、『浄源疏』の成立の経緯についてであるが、浄源はその『疏』の序文において良賁の『広疏』と体元大士の『略注』に言及し、

良賁法師解之於前、…(略)…体元大士注之於後、…(略)…『広疏』盛行於三京、而其『略疏』沈隱於二

浙。…（略）…浄源撫両疏之旧章、苦志勞身、解三藏之新訳。

（統藏四一冊、一四九左上）

と記している。すなわち、良賁と体元大士は相次いで不空訳に対して注疏をあらわした。それぞれ『広疏』と『略疏』と称する。『広疏』は三京（長安、洛陽、開封の一带を指す）において盛んに行われたが、『略注』は両浙（浙江省の一带を指す）の地に埋没して知る人が少なかった。浄源はこの両疏を参考にして新たな『疏』を作った、というのである。この記述から、『浄源疏』は良賁と体元大士の『疏』より直接影響を受けたことがわかる。さらに、良賁については、『宋高僧伝』卷五（大正五〇、七三五上―下）に伝記がある。それによると、良賁（七一六―七七七）は俗姓を郭といい、河中虞郷の人で官僚の家柄であった。彼は儒教の經典に通達していた上、仏教の經論にも長けていた。唐の永泰年間の中頃（七六五）、代宗の命を受けて、不空が主宰した『仁王經』を重訳する訳場に参加することとなり、その後、再び代宗の命により、不空が翻訳して代宗自らが序文を寄せた『仁王護国般若波羅蜜多經』二卷に『疏』を付した。その『疏』は七卷から成り、浄源が言及した『広疏』にあたる。

一方、体元大士については、生年と経歴は一切不明であり、その『略疏』も現存していない。前掲の浄源の記述によると、『略疏』はすでに宋代にはその存在が知られなくなっていたようであり、早い時期に散逸したものと考えられる。そのためその内容を考察することはできない。従って、本稿では、『浄源疏』の本質を明らかにするため、浄源自らが言及した『良賁疏』にも留意して、比較考察を展開していきたい。

まず、浄源は『疏』を作る目的について、本疏の序文の中で、次のように述べている。

夫儒典之述誠明、猶釈教之談寂照焉。彼以聖人自誠而明、類妙覺即寂而照矣。賢者自明而誠、比等覺即照而寂與。斯皆為教不同、而同歸乎善者也。

浄源の『仁王經疏』について（王）

（統蔵四一冊、一四九左上）

すなわち、彼は、儒教がその典籍において誠明を述べることに仏教が寂照を教えることは同じである、儒教の聖人と賢人の段階はそれぞれ菩薩の妙覺と等覺に対応している、教えの形式と内容は異なるが、善に帰することでは同じである、というのである。

しかし、浄源の見るところ、その時代の人々はこの道理がよく理解できず、仏教と儒教を「域外教」と「域内教」という二教にわけて、その対立点だけに目をむけ、両者の共通性の方を見落とした、ということになる。ただ、幸いに、「大広智不空三蔵」が「月邦の寂照を通じて、中華の誠明にいたる」<sup>(4)</sup>（統蔵四一冊、一四九左上）（仏教の寂照の境地をきわめて、中国の誠明の理想に到達している）ところの『仁王経』を重訳して、その仏教の真理の「寂照」の境地と儒教の理想たる「誠明」ということの同等性を明らかにして、その両教の共通性を改めて提示したのであるとして、浄源はその意義について次の如くに評価する。

夫然則由誠明而護国、豈唯樂熙寧於兆民、亦資忠孝於百辟矣。

（統蔵四一冊、一四九左上）

要するに、『仁王経』の存在は国家の安定、忠孝の道徳を宣揚するに大きく役に立っている、というのである。<sup>(5)</sup> 儒教と仏教との関係についての浄源の考え方は、既に他の機会に論じたので、ここでは繰り返すことはしないが、一言で言えば、浄源は本来的には、仏教優位の立場をとってはいる。とはいっても、時代の潮流に逆行して三教融合に反対していたわけでもない。例えば、上に引用した浄源の言葉の中に、「同帰乎善者也」と言ったのは、永明延寿の『萬善同歸集』の題目を連想させ、忠孝という徳目を高く評価していることは「孝」を重視する仏日契嵩の主張と部分的に一致している。要するに、浄源には仏教と儒教との間に共通性を見出し、仏教が積極的に社会的な役割を果たすことを期待する、という姿勢が読み取れるのである。

このような姿勢は『仁王經疏』の本文にも見える。例えば、解題の部分に記述されている「仁王」の意味について、各師の注釈を比較することによって、『浄源疏』の特徴が明らかになる。

吉蔵…仁王、仁者施恩布德故名爲仁、統化自在故名爲王。（大正三三、三二四中）

円測…仁者忍也、善惡含忍。王者往也、衆所歸往。故名仁王。（大正三三、三五九中）

天台…施恩布德故名爲仁、統化自在故稱爲王。…（略）…又仁者忍也、聞善不即喜、聞惡不即怒、能含忍於

善惡、故云忍也。王者統也、四方歸統故也。（大正三三、一五三中）

良賁…言仁者人也、正理解人多思慮故、依義訓人有恩親故、依書解者、如『大伝』云…（略）…『論語』

曰…（略）…王者主也、…（略）…王者往也、天下往之。（大正三三、四三四中）

浄源…夫仁之爲德、有能仁焉、有至仁焉。至仁罰不仁、興利除害也。能仁以濟衆、兼愛無私也。…（略）…

王者天下之所歸往也。（統藏四一冊、一四九左下）

以上の引用を分析すると、「王」の解釈については、各師の捉え方はほぼ一致しているが、「仁」については、浄源と他の諸師とは違っていることがわかる。吉蔵、円測、天台の三疏のうち、『天台疏』は前二者を組み合わせて得たもので、その言うところにおいて三者は大筋で一致している。要するに、仁の意味には忍と施恩布德の二義があるというのである。忍とは、六波羅蜜、或いは十波羅蜜の一つであり、あらゆる苦難に耐えること、また許すことで、忍辱ともいう。すなわち、忍辱波羅蜜である。施恩布德とは忍と同じく六波羅蜜、或いは十波羅蜜の一つである布施波羅蜜を指し、忍とともに大乘仏教の根本理念の一つである。このような解釈は伝統的なものといえよう。『良賁疏』では、「仁」について、それを正・依義・依書の三つの角度から解釈している。これは『良賁疏』の広疏という性格に相応しいもので、総合的な解釈ともいべきものであろう。特に注目すべきことは、儒教の種々の經典に現れる「仁」に関する文言を、上の三点のうちの第三の「依書」の中で引用している

ことである。しかし、この「依書」はあくまでも前二者の補充的な注釈にすぎない。

これに対し、浄源は「仁王」の解釈にあたり、「仁」を「能仁」と「至仁」の二種類に分け、能仁が衆生を救い、兼愛し無私であることであるのに対して、至仁は不仁を罰し、利を起こして害を除くことであると説いている。これと関連して、同じ浄源の著作である『仏遺教経論疏節要』の中に、

釈迦此翻能仁、姓也。牟尼此翻寂默、名也。

（大正四四、八四五中）

という言葉がある。すなわち、「能仁」は釈迦の訳語であり、したがって『浄源疏』の上掲文中の「能仁」も釈迦を指す用例であったと考えることができる。無論、『浄源疏』の場合は、必ずしも能仁と至仁を仏教と儒教に配当しているわけではないが、少なくとも、浄源が相当程度儒教の教えの価値を認めていて、それを仏教と調和させて両者の対社会的な面における共通性を強調していることに間違いない。また、儒教的な文言を用いて仏教経典を説明し、当時の仏教徒以外の人に分かりやすく受け入れられるように工夫したのであると考えられる。

従って、これらの点から見れば、本疏は浄源の他の著作と違って、華嚴宗の固有思想を展開するよりも寧ろ、『仁王経』の社会面の意義を強調するため、そのテキストに沿って字句の解釈、所謂随文解釈を行おうとしていたことが分かる。

## 二 構成における『浄源疏』の特徴

『浄源疏』は『良賁疏』を参考にしながら作ったものであるとはいえ、単なる『良賁疏』、或いはそれ以外の先行する疏の模倣ではなく、それ自身の顕著な特徴をもっている。この特徴を同『疏』の構成とその思想の両面か

ら分析していきたい。

先ず、構成に於いてであるが、浄源は「智者は解題において五重玄義を折り、賢首は釈經において十門妙旨をひらく」<sup>(6)</sup>（統藏四一冊、一五〇右上）という。「五重玄義」というのは、智顗によって『法華玄義』、『金光明玄義』などの注釈書の冒頭に提示されたところの、いわば注釈書全体の内容の分類・整理のカテゴリーとでもいふべき「釈名・弁体・明宗・論用・判教」の五義のことである。このような注疏の構成は天台宗の学者たちによって天台系の書物の中に幅広く使われており、天台教学の特徴の一つとも言える。これに対して、「十門妙旨」というのは、恐らく法蔵が『華嚴經』の注疏である『探玄記』の初頭に提示した「明教起所由・約藏部明所撰・顯立教差別・簡教所被機・弁能詮教体・明所詮宗趣・具釈經題目・明部類伝訳・弁文義分齊・随文解釈」の十門を指すものであろう。

しかし、天台の五重玄義と違って、華嚴の十門は決まった形式を持っていない。例えば、『探玄記』以外では、法蔵は『五教章』の冒頭においては「建立一乘・教義損益・古今立教・分教開宗・乗教開合・起教前後・決択其意・施設異相・所詮差別・義理分齊」の十門を立て、また、澄觀は『華嚴經疏』の冒頭に「教起因縁・藏教所撰・義理分齊・教所被機・教体深淺・宗趣通局・部類品会・伝訳感通・総釈經題・別解文義」の十門妙旨を提示する如くである。浄源が『疏』の中に五重玄義と十門妙旨をともに挙げた理由は、天台に対して華嚴教学の特色を強調せんとするために他ならないであろう。

しかし、浄源自身は自らの『疏』をこの「五重玄義」や「十門妙旨」のシステムに従って造ろうとしたわけではない。すなわち、『仁王經』の諸疏を比較すればすぐにわかることであるが、『浄源疏』を除いて他の諸疏はこの「五重、十門」のような一定の構成によって組織されている。例えば『天台疏』は五重玄義の形式を用いており、良賁も『円測疏』に倣って、「叙経起意・明経宗体・所撰所被・正解本文」の四門を立てている。しかし、

浄源自らはこのような形式を採るものではないと言明する。浄源が天台と華嚴の注疏の仕組みに言及しながらも、敢えて単に十門の中の一つである釈題のみを出した理由は、彼によると次の点に存する。すなわち、本『疏』は、浄源のそれ以外の著作、たとえば『華嚴妄尽還源觀疏鈔補解』や『原人論発微録』が華嚴教学の特色を明確にして華嚴宗の優越性を高揚することを目的としていたのとは違って、『仁王経』を広く世の人々に広めようとすることをその意図とするものであったのである。従って、嚴密な教学的な構造に拘る必要はなく、寧ろ学術的な煩瑣な形式を避け、十門妙旨の本質を各品の随文解釈に自然な形で取り入れようとするのである。

また、『仁王経』の分科について、『浄源疏』はいう。

此経一部、具列八品。初一品序分、次六品正宗、後一品流通。

（統藏四一冊、一五〇右上）

すなわち、浄源は道安の序分・正宗分・流通分の三分法を用いて、本経を内容的に三つの部分に分けるのである。

ところで、本経の分科については、各注釈者にそれぞれの意見がある。三分法のほか、四分法もある。例えば、真諦は全八品のうち初品を發起分となし、次の五品を正説分となし、第七品受持品（奉持品）を王得護国分となし、第八嘱累品を流通分となす。また、三分法にも、道安の三分法の他、たとえば、円測は親光造・玄奘訳『仏地経論』に倣って、序品を教起因縁分、次の五品を聖教所説分、最後の二品を依教奉行分とすることである。良賁もこの円測のシステムを踏襲している。

更に、第七品の帰属についても、各師の意見は分かれる。すなわち、それを正宗分、或いは聖教所説分に属せしめる説と流通分、或いは依教奉行分に属せしめる説の二つがある。浄源の主張は大筋で『吉蔵疏』及び『天台疏』と一致している。この点からしても『浄源疏』が『良賁疏』の単なる模倣ではないことがわかる。



### 三 『浄源疏』に現れる華嚴教学の特色

浄源の『仁王経疏』はそれが華嚴宗の宗旨を明らかにするために作られた書物ではないとはいえ、華嚴教学を用いて『仁王経』を解釈し、結果として浄源独特の華嚴思想に対する理解を示す箇所も少なくない。

例えば、『仁王経』の

仏坐其上、広宣法要。一々座前、各現一華。是百億華、衆宝嚴飾。於諸華上、一々復有無量化仏、無量菩薩、四衆八部、悉皆無量。

(大正八、八三五上)

という経文に対して、浄源は次のように解釈している。

表行布行、如十地菩薩、各修一度。…(略)…表円融行、如一地之中、各具諸地功德。主伴齐現。…(略)…無量者、表修因行無量、証果徳亦無量也。而其主伴皆在諸華之上者、表因該果海、果徹因源。

(続蔵四一冊、一五三右上)

すなわち、仏を囲んでいる菩薩たちの一々の座の前に、各々一つの蓮華が現ずるとは、華嚴の行布門、つまり菩薩修行の段階の種種なる現実相を表し、十地のそれぞれに住する菩薩が各々「一度」、すなわち、それぞれの菩薩地に対応する特定の一つの波羅蜜を修する如くである。これらの「百億」の蓮華が「衆宝」で飾られているとは、華嚴の円融門、すなわち仏の悟りの境地が主伴円融して、一つの美しい調和の状態を現出していることを表し、それら十地の一つ一つが、その中に各々他のすべての菩薩地の功德を具備する如くであるというのである。華嚴の主伴円融門からいえば、無量の化仏はそれぞれに主であり、それぞれに無量の菩薩と四衆八部を伴って

るのである。それらの化仏とそれぞれの菩薩・四衆八部がともに無量であるということは、所証の果徳と所修の因行がそれぞれに無量であることを表わしている。それぞれの主と伴とがそれぞれに一つ一つの蓮華の上にいるということは、因が果海を包括し、果が因の源まで通徹していることを表わすのであるというのである。

この段落では、華嚴宗の行布門、円融門、主伴門などの概念を用いているほか、上掲の浄源の解釈文の最後の文句（因該果海、果徹因源）も法蔵の『華嚴経金獅子章』（大正四五、六七〇下）や澄観の『大方広仏華嚴経随疏演義鈔』（大正三六、三中、及び四八下）に出てくる言葉であり、浄源が法蔵・澄観の華嚴教学の影響下にあらることを示している。

これを『良賁疏』と比較してみると、同じ経文に対して良賁は僅か数行をもって字句の簡単な説明をしているだけであって（統蔵四〇冊、四三八左上）、『浄源疏』と『良賁疏』とは関心が向けられている問題点が違っており、『浄源疏』に華嚴的な色彩が強いことが伺われる。

また、『仁王経』の第二品たる「観如来品」に対して、浄源は三種般若の思想を用いてそれを分析している。この三種般若ということでは、『円測疏』、および『良賁疏』においても、この同じ「観如来品」に対する注釈において、三種般若に対する言及が見出される。しかし、その場合円測も良賁もこの三種般若を個々の字句や個別の概念に適用して、それらを解釈しようとするのに対して、浄源は三種般若を『仁王経』の「宗趣」そのものに当て嵌めている、すなわち浄源はこの三種般若を『仁王経』の思想の根本の拠り所としているのである。たとえば、浄源はいう、

謂前「観如来品」、依『賢首略疏』三種般若、潜申宗趣。次後二諦品、準『圭峰纂要』三種智慧、密示宗体。（統蔵四一冊、一六一右上）

ここにいう「賢首略疏」とは、華嚴宗の三祖・賢首大師法蔵の『般若波羅蜜多心経略疏』を指す。また、「圭

峰纂要」とは、華嚴宗第五祖・圭峰宗密の『円覚經纂要』のことであるが、この典籍が現存していないため、その「三種智慧」とはどのようなものであったのかは、明確には知りえない。さらに、「宗体」とは宗旨の本体、宗門の根本教義というほどの意味であり、「宗趣」とはその宗の根本的立場、思想の目指す方向、おもむくところを意味する。要するに、浄源は法蔵が提出した三種般若の思想を抛り所として『仁王經』の宗趣を表そうとしているのである。

さらに、木村清孝博士の研究によると、三種般若の思想は成実論師、淨影寺慧遠、天台智顗、三論吉蔵、華嚴智儼・法蔵・宗密などによって論じられたが、それぞれ解釈を異にしている。<sup>⑦</sup>前にも述べたように、『良賁疏』にも、解釈原理として同じく三種般若の概念が用いられているが、良賁がそれら諸師の思想の相違を考慮した形跡は見られない。また、それら先人たちの誰の三種般若説を採っていたのかも明確にされていない。これに対して、浄源は、上に示す如く、法蔵が『心経略疏』に用いた三種般若説を採ったことを明言し、その法蔵の三種般若の概念を枠組みとして「観如来品」の内容をそれに当て嵌めて解釈しようとしているのである。

そもそも、華嚴系の三種般若に対する理解には、智儼に見られるように、主として成実論師の説を「型」として継承し、その智儼が『金剛経略疏』においてしたように、三種般若を理・行（智慧）・教の三義にそれぞれに配する捉え方がある。智儼の解釈を承けて、法蔵は『心経略疏』に、次のように述べている。

総以三種般若為宗。一実相、謂所觀真性。二觀照、謂能觀妙慧。三文字、謂詮上之教。

（大正三三、五五二中）

これは般若波羅蜜というものを、実相・観照・文字の三種般若、すなわち、所觀の真理としての「真性」（理）、能觀の智慧としての「妙慧」（行）、そして、それが「文字」によって表現されたものとしての教の三つの意味に分析し、それらを『般若心経』の宗、即ち主要内容とする宗趣論を示している。浄源はこれを全面的に依用し

て、法蔵の般若波羅蜜理解の仕方を用いて『仁王経』を解釈しようとしていることがわかる。

最後に、『仁王経』の教判についてであるが、浄源はそれについて次のように述べている。

昔賢首以円融三観、通般若心経、而判属実教。今推斯文、以一念妙慧之因、証諸地分満之果、乃属一乘同教。

（統蔵四一冊、一五七右上）

すなわち、法蔵は「円融三観」の教理を用いて『般若心経』を統一的に理解し、それを実教と判じたのであるが、今、この『仁王経』の经文を見るならば、此経が「一念妙慧」の「因」を以て、「諸地分満」の「果」を証するという教義を述べたところのものであることがわかる。従って、『仁王経』を一乘同教に属せしめるべきであるというのである。因みに、「円融三観を以て、般若心経を通じ」というときの三観とは、恐らく法蔵の上述『心経略疏』の次の如き文言に示されているところのものであろう。

智者大師依瓔珞经立一心三観義。一從仮入空観、謂即是空故。二從空入仮観、謂空即是色故。三空仮平等観、謂色空無異故。

（大正三三、五五三中）

「判じて実教に属せしむ」とは、法蔵の次の文言によるものである。

二蔵之内菩薩蔵収、権実教中実教所摂。

（大正三三、五五二中）

つまり、法蔵は智者大師智顗が『瓔珞経』の中に見出されるところの中観的な「一心三観」（「円融三観」）の教理を用いて、『般若心経』を権実教の中の実教に属せしめているのである。浄源は、これと同じ基準に従って、『般若心経』と同じく般若系の經典であるところの『仁王経』を一乘同教に属せしめ、その『仁王経』の教義に高い評価を与えたのである。

しかし、華嚴教学では、一乗の中で同教と別教の二つの項目とを分け、それぞれに異なった評価を与えたのである。例えば、『五教章』の場合で見ると、一乗同教は相對の一乗であり、一乗別教は絶対の一乗である。同教は他と対立しながらしかも共存する世界であり、別教は他から隔絶して特別な、絶対の境地であると主張しているのである。『浄源疏』の場合も、一乗同教と二乗別教を区別して使い、『仁王經』と『華嚴經』とを等しいと見なすことはできないとする理解が読み取れる。<sup>(8)</sup>

これと関連して、浄源は杜順のものとされる『法界観門』に準じて、『仁王經』に科文を施している。その場合、『法界観門』の三観のうち、前の二観、すなわち「真空絶相観」と「理事無碍観」のみを用い、最後の「周遍含容観」については、対応する対象がないため、それを導入してないのであるが、これは澄観の教学に従うものであると考えられる。澄観の教学において、周遍含容観は『法界観門』の三観の中で最高の境地に位置づけられ、澄観が提出した四法界の事事無碍法界に対応し、華嚴の一乗別教の本旨をなすものともいえるところのものである。浄源が『仁王經』の注釈に於いて、その教理分配で第一観と第二観に留まった理由は、恐らく澄観が天台の三観を『法界観門』の三観の第一真空観の中に収めたことと同じ趣旨であって、華嚴一乗別教の他から隔絶した優越性を強調するため、本經の教義がいまだそれ（一乗別教）に至らざるところの一乗同教の段階に留まるものである、と言おうとしたからに他ならない。

#### 四 『浄源疏』に見られる浄源の宗派意識

浄源はその時代の他の人々と比べ、宗派意識が極めて強い人であったといえることができる。それは当時の中国仏教界において宗派形成の動きが一段と強まっていた中、禪や天台から受けた刺激によるものであり、また華嚴

宗自身の変遷の経緯から見ると、浄源の特殊な修学経歴、思想背景に起因するとも考えられるが、それについては紙幅の制約があるので、その詳しい論述は別の機会に譲らざるを得ない。因みに、浄源の行状について、基本資料としては、「宋杭州南山慧因教院晋水法師碑」<sup>(10)</sup>があり、それに対する最近の研究成果として吉田剛博士の研究論文が挙げられる<sup>(11)</sup>。

以上の分析によって、『浄源疏』に含まれた浄源の教学がかなりの程度の宗派的色彩を帯びたものであったという点は既に明らかにし得たと思われるので、次に浄源の華嚴教学におけるその独自の諸点を明らかにしておくことにしよう。まず、『浄源疏』に引用された經典の一覧をその引用回数とともに示すことにしよう。

華嚴系

華嚴經 一四 大疏（澄観） 一二 演義鈔（澄観） 一

十地経論 四

瓔珞本業經 三

梵網經 一 梵網疏（法蔵） 三

法界観門（杜順） 一

如来蔵系

楞嚴經 七 楞嚴経疏（子璿） 二

円覚経 一 円覚疏（宗密） 一 纂要（宗密） 二

起信論 五 起信論疏（法蔵） 一

中観三論

大品般若 二

大智度論 三

心経略疏(法蔵) 三

維摩経 三 維摩経疏(僧肇) 一

肇論(僧肇) 一

中論 一

唯識俱舍

俱舍論 五

摂論 三

三教関係

注四十二章経(智円) 一

注孟蘭盆経(宗密) 二

原人論(宗密) 一

北山録(神清) 一

ここで先ず注意すべきこととして、『仁王経』を解釈する場合、その要所において浄源は必ず華嚴宗の思想と教理を用いてそれらの解釈を行い、その典拠として華嚴系と如来蔵系の經典とともに多数引用しているところがある。また、『起信論』の説く「一心」の思想を橋渡しとして華嚴系と如来蔵系の教理を綜合し、それによって『仁王経』の解釈を行おうとしていることも注目に値する。

次に、華嚴宗の諸祖の中で、『起信論』、『円覚経』などを重視する澄観・宗密系の思想、及び澄観・宗密的に解釈された杜順・法蔵の思想に依拠することにより、澄観・宗密系とは異なる智儼・法蔵の思想系統を意識的に

回避していることが伺われる。ことに、智儼については全く言及がなされていないのであるが、このことは浄源の諸著作に共通する特徴となっている。

次に、『維摩経』の理解に関して、浄源は、

羅什三藏生肇二師、各申義解。今依本宗正解、深文而獨取肇師、兼明奥旨。

（統歳四一冊、一五九左上）

という。すなわち、羅什・僧肇・道生の三師にはそれぞれ『維摩経』の注疏があり、それぞれ独自の、また、深い解釈を示しているのであるが、浄源はこれら三師の中で、敢えてひとり僧肇の観点のみを援用する。その理由は、僧肇の観点のみが華嚴宗の宗旨と一致するからである。僧肇に対するこの浄源の認識について、鎌田茂雄博士は次のように述べておられる。「澄観の思想の中には、僧肇の思想が浸透していた。浄源はこの立場をますます徹底させ、逆に肇論の思想を理解するのに、澄観の華嚴をもってした」<sup>(12)</sup>。すなわち、鎌田博士は浄源が華嚴教学の立場から僧肇の思想を理解したことを指摘しておられるのである。浄源の『仁王経疏』において、僧肇のみを尊んだ理由は、三論宗の観点から三師の相違を明らかにせしめる、というよりも、華嚴教学、特に澄観の教学を基準として僧肇の思想を解釈しようとしたからに他ならない。この点については、筆者は他の機会に浄源の『肇論』に関する著作の研究を発表する予定であるので、ここでは省略したい。

最後に、浄源において唯識經典の引用が最小限に留まっていることも注目し値するところであろう。『浄源疏』を円測、良賁の諸疏と比較すると、浄源が『良賁疏』などが採用しているところの唯識的な解釈を殆ど用いていないことが明らかである。<sup>(13)</sup> 澄観の時代から、華嚴教学の関心の対象が既に法蔵時代における唯識から天台、禪宗などへ移行したことが、ここに反映されているのである。このことは、また、『浄源疏』が『良賁疏』の単なる模倣ではないことを改めて証明したことになる。



一方、『浄源疏』において三教関係の書物の引用が幾つか見出されるということは、華嚴教学とは直接関係はないが、浄源がその『仁王経疏』の序文に提示しているところの、その『疏』の撰述目的と一致している。なお、浄源が天台の山外派、特に智円から受けた影響については他の箇所でも論述したい。

このような經典の引用の仕方その他に、浄源の宗派意識は、もう一つ、『浄源疏』の中に各所に見られるところの華嚴宗諸祖に対する呼称の用い方に現れている。例えば、彼は杜順を吾祖と称し、杜順の『法界觀門』を祖師觀門といい、法蔵を賢首國師と称し、澄觀を清涼國師と称する。浄源以前及び同時代の人物で、華嚴宗諸師に対して、このような呼称を用いた例は殆ど見当たらず、このような呼称は浄源以後になって、ようやく普及してきたところのものなのである。これは浄源が華嚴宗を確立する事業の一端を担っていた一部分である。この点については、他の箇所でも詳しく述べたい。

## おわりに

『仁王経』は中国で作られた經典でありながら、中国の諸宗を通じて各師に重視されてきた。宋代に於いて天台宗が同じ護国經典である『金光明経』を重んじたことを踏まえ、浄源が『仁王経』を扱った意義を考えるべきであろう。その意図は天台、禪などと対抗して華嚴宗の独自性を主張することにあつたのであろうと推測される。浄源は、また、『玉蘭盆経』、『遺教経』などに対して注釈を著しているが、その目的は一般の知識人を対象として、彼らを仏教に誘引することにより、華嚴教学の影響を拡大することを狙ったものとも考えられる。事実、『仁王経疏』には華嚴宗の色彩が強く顕れているのであるが、その場合も華嚴教学の複雑な哲学体系を避け、できる限り一般の人々にとって分かり易い言葉で書かれているのである。また、『浄源疏』は先行の『良賁疏』な

どを参考しながらも、構成と内容の両面において、独自性を示している。特に、内容的には、經典の引用、文句の解釈などにおいて、華嚴教学に対する浄源の独特の理解を示している。更に、『仁王経』の社会面の意義と教学的価値を評価した上で、教判において、それを一乗同教であると判じている。浄源はそれによって、他宗に対してもつ華嚴教学の優越性を強調し、自ら華嚴教学に対して終始一貫、変わることのない信頼を改めて表明したのである。

## 注

- （１） 椎尾弁匡『国訳一切経』・釈経論部五下、大東出版社、一九三四年、二九五―三〇五頁。  
望月信亨『仏教經典成立史論』、法蔵館、一九四六年、四二五―四四〇頁。
- （２） 佐藤哲英『天台大師の研究』、百花苑、一九六一年、五一七―五五三頁。  
若杉見竜『仁王護国般若経疏について』（印仏研、四三卷、一九九四年）。  
武内紹晃『円測の「仁王経疏」をめぐる諸問題』（仏教文化研究所紀要、一三号、一九七四年）。  
木村邦和『仁王経疏』間の学説の異同（印仏研、五五卷、一九七九年）。
- （３） 上掲佐藤哲英『天台大師の研究』、五一七頁。
- （４） 原文…「通月邦之寂照、洞中華之誠明」。
- （５） 王頌「三教交渉史よりみた浄源の立場」（国際仏教学大学院大学研究紀要、四号、二〇〇一年）。
- （６） 原文…「或謂…智者解題、折五重玄義。賢首釈経、闡十門妙旨。今述斯文、但略注経題、而不開玄談者、何耶？」。
- （７） 木村清孝「金剛経略疏の三種般若思想」（印仏研、一八卷、一九六九年）。
- （８） 一乗同教と別教の違いは非常に重要かつ複雑な問題で、意味も場合によって違うので、ここで本テキストの意味に準

じて解釈している。

- (9) 『華嚴法界玄鏡』 大正四五、六七五上―下。
- (10) 『中国仏寺誌・慧因寺志』、明文書局、一九八〇年。
- (11) 吉田剛「晋水浄源と宋代華嚴」(禪学研究、七七号、一九九九年)。
- (12) 鎌田茂雄『中国華嚴思想史の研究』、東大出版社、一九六五年、六〇―一頁。
- (13) 円測疏と良寛疏の比較について、武内紹晃「円測の「仁王経疏」をめぐる諸問題」(仏教文化研究所紀要、一三号、一九七四年)を参考。

example, Jingyuan's attitude towards the masters of the Sanlun School 三論宗—among whom he highly appraised only the thought of Sengzhao 僧肇—indicates that his interpretation of the teaching of the Sanlun School is from a Huayan perspective.

*Ph.D.,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*

浄源の『仁王經疏』について（主）

## Summary

### A Study on Jingyuan's Commentary of the *Renwang boruo jing*

Song Wang

浄源の『仁王經疏』について  
(主)

*Renwang boruo jing* 『仁王般若經』 is considered an apocryphal scripture composed in China. There are two extant translations of this scripture, whose translators have been regarded as Kumārajīva 鳩摩羅什 and Amoghavajra 不空. Many famous scholars from different schools wrote commentaries on these two translations. Since my concern is mostly with the thought and practice of Jingyuan 浄源 (1011-1088), a famous monk of the Huayan (Avataṃsaka) School 華嚴宗 of the Song dynasty, I focus my research on Jingyuan's commentary.

Similar to my prior paper on Jingyuan's attitude toward the confrontation between Confucianism, Daoism and Buddhism, my paper aims at investigating Jingyuan's thought in order to understand the influence of the *Renwang boruo jing* in the Song dynasty.

The paper comprises four parts. Firstly, I clarify the bibliographical background of this commentary in order to show the connections between this commentary and other earlier commentaries on the *Renwang boruo jing*. I also inquire into the author's purpose in writing this commentary. In the second part, I examine the structural characteristics of this commentary, which appears to be independent in this respect from the earlier commentaries. In the third part, I focus on the content of this commentary and analyze some details which bear the doctrinal marks of the Huayan School. Lastly, I compare the texts quoted or consulted in this commentary with those in the earlier commentaries and identify some distinguishing features of this work. For